

推薦のことば

時代で語ると嫌われますが、私が医師になった23年前にはいわゆる医局への入局をせずに医師としてのキャリアを開始することは一般的ではなく、その決断をするにはたいへんな勇気が必要でした。その際には、医師のキャリアメイキングについて書かれたさまざまな書籍を入手し、読み、時には筆者の先生に会いに行き直接にお話をうかがうなどしたことを覚えています。自分自身相当に悩んだ時期のことなのでその過程はよく覚えています。そのときに読んだ書籍のいくつかは、まだ私の書庫に収まっています。

そのときにいただいた助言の有り難みはいつまでも忘れるものではありません。時が経てばその意味がやっとわかるようになったことも多々あります。このような経験もあって、若者の進路相談は努めて受けるようにしています。

私の立場は変わり、若者を指導する立場になりました。感じるのは、医師としてのキャリアの積み方の多様性が増しているということです。出身大学に残るかどうかにはじまり、後期研修をどうするか、さらに専門性を高めるためにはどうすればよいか、学位はいつ取るべきか、海外留学はすべきかどうか、医師としてある程度一人前となったら独立するのか、研究するのか、都市部で働くか地域で働くか、行政に入るのか、行政に入るのも国際公務員のような形で入るのか、あるいは専門性を武器として企業に入って力を発揮するのか……その選択肢の幅を羨ましく思いますが、一方でこれだけ多様なキャリアパスをどのように選んでいくかを考えることに要する気力は、並大抵のものではないだろうと思います。大変なはずです。

そこで先輩の示してくれる道はやはり参考になるものです。具体例があれば考えることができます。お説教がましくなく、自分のやっていることと、そこにどう考えてたどり着いたかを淡淡と示す。そうした内容は常に求められているものだと思います。本書は、そのように迷いに迷っている医学生や医師の方々に大いに参考になることでしょう。

国立国際医療研究センター 国際感染症センター長
大曲貴夫